

オズヴァルド・ニョッキ＝ヴィアーニ(1837-1917)の 「三つのインターナショナル」論

勝 田 由 美

“Le tre internazionali” di Osvaldo Gnocchi-Viani

KATSUTA Yumi

目 次

序

1. 『三つのインターナショナル』にみる「労働の社会主義」
 - (1) ジュネーヴの「労働者同業組合国際連盟」
 - (2) 「労働の社会主義」
2. 1870年代のイタリアにおける労働運動と社会主義
 - (1) イタリアにおける第一インターナショナル
 - (2) ニョッキ＝ヴィアーニとローマの労働運動
3. 結びにかえて

序

オズヴァルド・ニョッキ＝ヴィアーニは、日本のイタリア史研究ではあまり知られていない人物である。彼は、1837年、オスティッリア（マントヴァ県）に生まれた。学生時代からマッツイーニに傾倒して共和主義者として活動をはじめたが、イタリア統一後は、第一インターナショナルの創設（1864年）やパリ・コミューン（1871年）を経てマッツイーニへの批判を強め、社会主義へと接近していく。彼の「社会主義」は、マルクス主義とも、また、イタリアにおける社会主義運動の先駆的形態とされるアナーキズムとも異なり、労働者の自律的組織化を基礎に構想された社会民主主義的サンディカリズムともいえるべき独自のものであった。

ニョッキ＝ヴィアーニの思想は、社会的不均衡の顕著な19世紀末イタリアの現実への対応として理解されなければならないが、マルクス主義を基準とする少し前までの社会主義研究では、彼の思想や運動は、必ずしもそれ自体としての意義を認められてこなかった。そして、「折衷主義」「同業組合主義」などと否定的に評価されるか、評価される場合でも、ドイツの

社会民主党をモデルとする「改良主義」のイタリアにおける先駆者として位置づけられることが多かった⁽¹⁾。ところがこの数年、新たな伝記的事実の発見や、彼自身の著作の刊行が相次いでおり、ニョッキ＝ヴィアーニは、イタリア労働運動の先駆的組織者、そしてイタリア的な社会主義の代表的存在として、再評価されつつある。

ニョッキ＝ヴィアーニに関する先駆的研究として現在でも必ず言及されるのは、F. デッラ・ペルータの論文である。デッラ・ペルータは、ニョッキ＝ヴィアーニを中心とするローマの第一インターナショナル支部が、マルクスともバクーニンとも異なる独自の志向を有する労働者組織であったことを明らかにした⁽²⁾。1970年前後には、ニョッキ＝ヴィアーニの思想と行動にマルクス主義にはない豊かな人間性を見いだした、L. ブリグッリヨの研究が注目される⁽³⁾。1980年代になると、19世紀末ミラノの労働運動に関する実証研究の深まりのなかで、そこにおけるニョッキ＝ヴィアーニの役割や影響が明らかにされていった⁽⁴⁾。そして、この10年ほどで、G. アンジェリーニにより、ニョッキ＝ヴィアーニに関する様々な事実や資料の掘り起こしが精力的に進められた。アンジェリーニは、ニョッキ＝ヴィアーニの思想におけるマルクス主義との異質性やマッツイーニ、サン＝シモンの影響を強調し、彼を、レジスタンスで活躍したカルロ・ロッセッリへと連なるリバータリアン社会主義の先駆者と位置づけている⁽⁵⁾。最近ではその一方で、ニョッキ＝ヴィアーニと労働運動との関わりを強調するP. フェッラーリスの論考や、彼の多岐にわたる思想と行動をテーマ別に整理した、F. デッラ・ペルータ編のアンソロジーも発表された⁽⁶⁾。

さて本稿では、こうした最近の研究動向を念頭におきながら、ニョッキ＝ヴィアーニの初期の代表作である『三つのインターナショナル』（1875）にみられる思想を当時のイタリアの状況のなかで考察し、彼の思想の一端を明らかにする。

1. 『三つのインターナショナル』にみる「労働の社会主義」

(1) ジュネーヴの「労働者同業組合国際連盟」

1875年に発表された『三つのインターナショナル』は、ニョッキ＝ヴィアーニの最初のまとまった著作であり、晩年にいたるまでの彼の思想を貫く「労働の社会主義」ともいえるべき方向性がはっきりと示されている⁽⁷⁾。

本書でニョッキ＝ヴィアーニは、国際的社会主義の3大潮流として、①マルクスらの「権威主義的」社会主義、②バクーニンらの自治連合主義アナキズム、③労働者を主体とする労働組合主義、をあげ、「労働者自身による労働者の解放」を掲げる第三の潮流こそが、真のインターナショナルイズムに根ざした社会主義であるという。

周知のように、1864年に設立された第一インターナショナルは、すでに1872年9月のハーグ大会をもってマルクス派、バクーニン派に分裂していた⁽⁸⁾。後述のように、当時のイタリアではバクーニン派の影響が大きかったが、ニョッキ＝ヴィアーニも、ここでマルクス派を「権

威主義」と呼び、「総評議会の独裁的なまでの権力を再確認し、それを強化しようとする」と彼らを批判している。また、両派の影響力についても「真の勝利者はアナーキストである」として、バクーニン派に軍配をあげている⁽⁹⁾。だが、ニョッキ＝ヴィアーニが本当に支持するのはそのいずれでもなく、1873年10月にジュネーヴで設立された「労働者同業組合国際連盟」(Lega universale delle corporazioni operaie) (以下「同業組合連盟」と略記)という組織である。ニョッキ＝ヴィアーニによれば、マルクス主義とバクーニン主義は、方向性こそ異なるものの、ブルジョアジーの学問を基礎としている。しかし、真の、未来の社会主義は、名もない労働者たちの自律的な組合活動として築かれるのである。

「同業組合連盟」の実態や第一インターとの関係について詳細は不明だが、ニョッキ＝ヴィアーニによれば、この組織はバクーニン派インターナショナルのジュネーヴ大会(1873年9月)を契機に結成されたもので、その規約は労働者自らが編集にあたる機関紙『労働者連合』(L'union des travailleurs)に掲載されている⁽¹⁰⁾。その規約によれば、「同業組合連盟」は、労働者組織の国際的連合として設立され、各国の状況に応じて選挙権も手段としつつ、「労働者が自ら指導する、労働者の必要と心情に根ざした運動」を展開する。この組織は、個々の労働者組織の自立性を尊重し、連合主義をとる点ではアナーキズムに近いが、経済闘争に基礎をおき、議会政治への参加も認めるところは異なっている。

第一インターナショナルの研究史では、1873年9月のジュネーヴ大会は、バクーニンのアナーキズムというよりギョーム(ベルギー代表)的な自治連合主義が確立された大会とされるらしい。「同業組合連盟」は、同大会の直後にジュネーヴで設立されていることから見ても、この自治連合主義の流れを汲むものと考えられる⁽¹¹⁾。しかし、この組織は、第一インターナショナルの研究史でも全くといってよいほど触れられておらず、小規模で短命に終わったようだ。イタリアの労働運動・社会主義運動研究においても、この「同業組合連盟」は、ニョッキ＝ヴィアーニとの関わりでわずかに触れられるにすぎない⁽¹²⁾。

では、ニョッキ＝ヴィアーニは、この組織のどこに、あるべき労働運動、社会主義運動の理想を見たのだろうか。一方で彼は、労働者の職業別(per arti e mestieri)組織化は、イギリスでもっとも早く発展したと述べているが、たとえばなぜ、イギリスの労働運動のようなよく知られた例をモデルにしなかったのだろうか。

ニョッキ＝ヴィアーニによれば、「同業組合連盟」は、1874年にシェフィールドで開催されたイギリスの労働組合全国大会に代表を派遣し、国際連帯の必要性を主張して加盟を呼びかけた。しかし、イギリスの労組代表からは「大陸の労組は政治家に操られている」としてその革命性を警戒する発言が相次ぎ、加盟を支持する意見も見られたものの、結論は持ち越され、結局は実現しなかった⁽¹³⁾。ニョッキ＝ヴィアーニは、イギリスの労働組合についてはその組織の広範さや、政治参加にみられる着実さや現実性を評価する反面、「三つのインターナショナルのいずれとも強い結びつきをもたない国内的組織」である点を批判的に見ている⁽¹⁴⁾。「国際的連帯」は、彼の新しい社会主義に不可欠の要素であった。

(2) 「労働の社会主義」

第一インターナショナルは、元来イギリスとフランスの労働者の主導により設立された組織であり、マルクスの起草した綱領も、「労働者階級の解放は、労働者自身がたたかいとらなければならない」ことを宣言していた。こうした労働者中心主義こそ、ニョッキ＝ヴィアーニの思想的原点であり、彼は、晩年の著作でも、その意味で自らを「インターナショナルリスト」と称している。ニョッキ＝ヴィアーニにとっては、マルクスでもバクーニンでもなく、「同業組合連盟」こそが、第一インターナショナルの精神を正統に引き継ぐものののだ。

ニョッキ＝ヴィアーニは、「同業組合連盟」の思想を「労働の社会主義」と呼ぶ。それは、労働者の職業別組織化を通じ、労働者自身の手で労働者の「経済的」「社会的」解放を目指すものである。ニョッキ＝ヴィアーニによれば、政治問題が国民 (Nazione) の問題であるのに対し、労働の問題は、経済と社会の問題であり、国際的な問題である。「労働の社会主義」は議会政治への関与について、アナキストのようにこれを拒否するのでも、マルクス派のように特定の政治行動を強制するのでもなく、国ごとの事情に応じて「各支部の自由にゆだねる」という。労働者同士の連帯において、重要なのは「社会問題」、すなわち労働と経済の問題に関する認識なのであり、それに比べれば政治的見解の相違などは「私的な」問題であるとされる⁽⁴⁵⁾。

ところで、ニョッキ＝ヴィアーニは、ある一点で「同業組合連盟」と見解を異にしている。「インターナショナルは、ブルジョアジーのえじきになって滅びた」のであり、我々は「ブルジョア的人々 (declassé) を排し、労働者大衆の直接的改善をめざす」とする『労働者連合』での主張に対し、ニョッキ＝ヴィアーニは、ブルジョアジーとプロレタリアートの区別は「経済的立場だけではなく、政治的主張や慣習、社会的志向により」定義されるという。階級とは、経済的立場であるとともに「認識」(scienza) でもあり、反動保守派のブルジョアジーとたとえばマツィーニやブランキを、同一の「階級」としてひとしなみに論じることはできないとする。そして、ブルジョアジーとプロレタリアートは、ともに「考える輩である人間の一部であり、相互に関わり合っている」という⁽⁴⁶⁾。

こうしたニョッキ＝ヴィアーニの階級観は、当時のイタリアの状況のなかで理解される必要がある。ニョッキ＝ヴィアーニ自身が『三つのインターナショナル』で述べているように、イタリアにおけるインターナショナルイズムは、「パリ・コミューンへの共感とマツィーニへの反感」から生じたもので、労働運動でも労働者組織でもなく、「民主的・ブルジョアの団体」を担い手としていた。そこには労働者の存在も見られたが、数の上でも影響力の上でも常にブルジョアジーが優越しており、ニョッキ＝ヴィアーニによれば、イタリアのインターナショナル加盟組織は、行動様式においては「マツィーニ主義的」な階級協調性を保持していたのである⁽⁴⁷⁾。1874年8月30日には、「同業組合連盟」の第一回大会がジュネーヴで開催され、初の大会ということで「例外的に」ブルジョアジーの参加も認められたが、このとき、ブルジョアジーをメンバーに含む参加団体は、大方イタリアのものであったという⁽⁴⁸⁾。理解あるブ

ルジョアジーの手によらなければ労働者の組織化自体が困難であるという現実のなかで、ニョッキ＝ヴィアーニは、労働者独自の組織や役割の重要性を提起しつつも、ブルジョアジーの役割を考慮せざるをえなかったのだろう。

さて、このように、『三つのインターナショナル』に見られるニョッキ＝ヴィアーニの社会主義思想は、第一インターナショナルの二潮流とされるマルクス主義ともバクーニン主義とも異なる、きわめて特異なものであった。研究史にもほとんど残っていないようなジュネーヴの労働者組織に託された「労働の社会主義」は、何に由来し、またどのような意味をもっていたのだろうか。次章では、当時のイタリアの状況のなかで、それを探るとしよう。

2. 1870年代のイタリアにおける労働運動と社会主義

(1) イタリアにおける第一インターナショナル

1861年のイタリア王国成立により、リソルジメント（国家統一運動）は穏健自由主義の勝利に終わった。以後、マッツイーニを中心とする共和主義者たちは、労働者の組織的運動をひとつの手段としてイタリアの民主的発展を追求していく。当時のイタリアにおける労働者の組織形態は、労働者の支払う会費を積みたてて冠婚葬祭や疾病時の費用を扶助しあう相互扶助協会であり、これが北部を中心に増加していった。相互扶助協会には、地域の労働者が職業を問わずに加入できる「一般」（*generale*）組合が多く、また、企業家や地域の篤志家の主導で設立され、彼らが「名誉会員」として組織の運営にあたるものが大半をしめていた¹⁹⁾。共和主義者は、こうした相互扶助協会をつうじて労働者の生活向上や教育・啓蒙をはかるとともに、それを普通選挙をはじめとする民主主義的諸要求の運動基盤とみていた。またマッツイーニは、労働者の問題よりも、未回収地獲得による国家統一の完成を最重要課題とし、階級対立は国民の統一を乱すもの、ストライキは暴力行為と考えていた。

しかし、共和主義者のなかにも、若手を中心に、労働者に固有の経済的・社会的問題を重視し、マッツイーニの姿勢に疑問を抱く者たちがいた。第一インターナショナルの設立年でもある1864年、彼らはイタリアに滞在したバクーニンと接触し、ナポリなどではバクーニンの影響下にサークルが結成され、そのいくつかはインターナショナルに加盟した。そして1871年、マッツイーニがパリ・コミューンの分権的自治主義を批判したことで、彼らインターナショナル派は、マッツイーニ主義と訣別する²⁰⁾。インターナショナル派の人々は、必ずしも明確な主張を共有していたわけではないが、政治問題よりも経済や社会の問題を重視し、マッツイーニの集権主義に対して分権主義にたち、議会政治に対して否定的であることでは共通していた。こうして、1870年代のイタリアは、アナーキズムに彩られることとなる。イタリアにマルクスの思想が紹介され、その名が知られるようになるのは、1880年代に入ってからのことである²¹⁾。

(2) ニョッキ＝ヴィアーニとローマの労働運動

ではこのとき、ニョッキ＝ヴィアーニの思想と行動はどのようなものであっただろう。彼は、学生時代から、イタリアの独立と統一を求めてパドヴァ、パヴィアでマッツィーニ主義者として活動していた。統一後は、ジェノヴァで『イル・ドヴェーレ』をはじめとする様々な共和主義系新聞の編集・執筆に携わるが、次第に労働問題への関心を強め、すでに1865年には、マッツィーニの一方的な唯物論批判に対してその一面性を指摘するとともに、「社会主義」への関心を表明している²⁸⁾。

パリ・コミュン後の1871年11月、マッツィーニの影響下にある相互扶助協会の連合体、労働者協会の第12回全国大会がローマで開催された。この大会にはインターナショナル派も参加し、マッツィーニ派と公然と対立、訣別する。このときニョッキ＝ヴィアーニは、「マッツィーニの政治的・社会的方針は過去40年にわたって労働者の解放に貢献してきた」という共和主義者の議案に棄権票を投じた²⁹⁾。晩年のニョッキ＝ヴィアーニは、「彼ら（インターナショナル派）への連帯感を示したかった」が、「マッツィーニの批判者とは手を結ぼうとしない組織の代表である私が、そうすることが正しかっただろうか」と、この件を回想している³⁰⁾。

ニョッキ＝ヴィアーニは、この数ヶ月前からローマに居を移し、いくつかの新聞の通信員と印刷所の校正とで生計をたてていた。1872年春頃には、イタリアに亡命中のジュール・ゲードと知りあい、マルクス主義を知る。ところで、この頃のローマの「労働者」は、数人から十数人の小さな作業所で働く職人的労働者が大半を占め、最大級のタバコ工場や金属・機械工場でも、せいぜい100人ほどの労働者を擁していたにすぎない³¹⁾。

1872年6月、ニョッキ＝ヴィアーニは、様々な職業の労働者で構成される「労働者同業組合連合」(Lega operaia d'arti e d'mestieri) (以下「同業組合」と略記)を結成した。この組織は、翌7月、アナーキストであるアンドレア・コスタの勧めで第一インターナショナルに加入してローマでは初の支部となり、8月にはリミニで開催されたイタリアのアナーキスト大会に代表を派遣している³²⁾。だがその一方で、ニョッキ＝ヴィアーニは、リミニ大会の直後にエンゲルスにも書簡をしたため、「労働者たちは政治にも宗教にも関心がない。普通選挙は彼らの心情から発するものではなく、ストライキこそ彼らの求めるものである」と述べている³³⁾。彼のマルクス主義の理解はまだ深いものではなく、バクーニン派との関係についてもよく知らなかったようだ³⁴⁾。だが、こうした彼の労働者に対する洞察は、同年12月、植字工・印刷工組合により、ローマで初めて行われたストライキによって現実のものとなるのである³⁵⁾。

「同業組合」の綱領は、1872年6月23日、F. ロッシ (木工細工師)、R. カトゥーフィ (建具屋)、E. モッツォーニ (工事監督者)、C. サルトーリ (内装屋)、ニョッキ＝ヴィアーニ、書記のI. モリーノから成る設立委員会により作成された。以下にそれを訳出しよう³⁶⁾。

「社会綱領」

労働者階級 (classe operaia) の問題に入り込んだあらゆる幻想やごまかしに終止符を打たなければならないことにかんがみ、

労働者は、相互扶助の名のもとに互いに不十分な施しを行うよう強制されることなく、また、労働者とは異なる利害をもつ党派や人々の保護下に置かれることのないよう、ひとつの組織として連帯しなければならないことにかんがみ、

またそれゆえ、労働者は、彼らのみが自身の必要や利害を判定しうるのであり、そののみが彼らの労働を現在の従属から解放する真の力であるから、労働者だけで連帯し、組織されなければならないことにかんがみ、

不平等を存続させ、他者の労働のうえに生きることに執着する特権的階層の、不正で専横なあらゆる強制から徐々に解放されるにもっとも適した手段、すなわち同志としての話し合いによる相互の説得と同意により、「労働組合」(Lega Operaia) という名の職業別組織に連帯する。

またさらに、世界中の労働者が同様の貧しい社会的状況にあること、そして、すべての労働者が国籍にかかわらず、同志愛と相互理解をもって、人類をひとつの大きな労働者組織とする労働の大義の勝利を大いに促すことにかんがみ、

労働を解放し、労働を人類 (Famiglia Umana) の唯一の基礎としようとする、世界中の全労働者に連帯を表明し、

労働組合は、現在の社会状況で独立した自由な労働者となるすべを保証されず、資本、土地、信用を独占的に保持する資本家や雇用者の意のままに従うことを強いられた存在である労働者によって、構成されなければならないことを決意する。

この綱領や設立委員会のメンバー構成からうかがえるように、「同業組合」は、労働者自身が運営する、様々な職業の労働者を擁した労働組合組織として設立された。そして設立後まもなく、セメント職人 G. メルキオーレが「小売商人、工場監視者、工事監督者」には投票権や役職に就く権限を認めない、とする議案を作成し、了承された。これにより、モッツォーニ、モリーノにかわってメルキオーレ自身が設立委員会に加わり、書記はニョッキ＝ヴィアーニが務めることとなった。

「同業組合」の加盟員は、1873年1月末には150人程度であったが、同年3月には、これにレンガ工460人が加わった。印刷工のストライキを支援したり、レンガ工の賃金および労働条件の改善を市長に申し入れたり、植字工やレンガ工を中心に、活発に活動した³¹⁾。

しかし、県や警察は、「同業組合」の活動に対する警戒を強め、1873年5月、ニョッキ＝ヴィアーニは、レンガ工のストライキへの関与により逮捕された。この後、「同業組合」の運営はアナキストの手に移る³²⁾。ニョッキ＝ヴィアーニは、同年8月の釈放後も「同業組合」に接近することなく、独自に仕立屋や印刷工の組織化に関わった。そして一方では、パレルモの『イル・ポヴェロ』、フェッラーラの『ラ・ランテルナ』、シエナの『イル・リズヴェッリョ』などの社会主義系新聞の通信員を務め、折から設立されたジュネーヴの「同業組合連盟」を紹介している³³⁾。

ところで、『三つのインターナショナル』の発行元でもある『ラ・プレーベ』紙は、ニョッキ＝ヴィアーニの義理の兄エンリコ・ビニャーミにより、1868年にローディで発行された。同紙は、アナキズムの席卷した1870年代のイタリアにあつて、議会や選挙に関わる政治活動の意義を否定せず、「漸進主義的」(evoluzionista)な独自の社会主義を表明したことで知られる⁶⁴⁾。ニョッキ＝ヴィアーニは、ローマに移り住んだ頃から、当地の政治的・社会的状況をここに掲載し始めたが、この「ローマ通信」が頻繁に登場するのは、むしろ彼の釈放後のことである。靴職人の協同組合、印刷工組合の地域をこえた連合、レンガ工組合など、彼は、「自らの手による解放」を傾向として示すような労働者組織の紹介に努めるが、その一方で、カトリック系の慈善的労働者組織やブルジョアジーの「名誉会員」を含む相互扶助協会を批判し、職業別のより戦闘的な労働者組織の必要性を、繰り返し論じなければならない⁶⁵⁾。教会の影響力が強いローマでは、自由主義さえ強力とはいえず、共和主義や急進主義も浸透に苦勞していた⁶⁶⁾。

ローマの労働者は、すでに労働者が広範な組織化を遂げたイギリスや、戦闘的な政治性を示すフランスとは、ほど遠い状況にあった。政府の弾圧、根強い教会の権威、弱体な民主主義、そして労働者の大半は「宗教と政治を見分けることもできない」ほど、受け身のままであった⁶⁷⁾。ジュネーヴの「同業組合連盟」は、挫折したローマの「同業組合」と同じく「労働者自身による労働者の解放」を掲げた組織であった。だが、ニョッキ＝ヴィアーニがこの組織に注目した理由は、そればかりではないだろう。「無益な相互扶助におち入り、空しい外国崇拜にわき立ち、あるいは革命的ロマン主義に血迷った」イタリアの労働者が、イギリスやフランスのようにすすんだ状況を理想化するのではなく、独自の運動や組織をつくりあげることへのぞみを託したからこそ、各支部(各国)の自立性を尊重した国際連合組織に意義を見出したのではないだろうか⁶⁸⁾。

3. 結びにかえて

『三つのインターナショナル』は、当時のイタリアの人々にどのようにうけとめられたのだろうか。ビニャーミは、同書に寄せた序文のなかで、「共和制が社会問題と不可分であるように、社会問題も共和制と不可分である」とし、「同業組合連盟」にみられる労働者組織からの政治性の排除を批判している。また、ビニャーミによれば、イタリアに亡命したパリ＝コミュン参加者ブノワ・マロンも、同書を批判している。すなわち、「同業組合連盟」の主張は第一インター創立宣言の繰り返しにすぎないうえに、革命精神の放棄を政治的中立と称している、と⁶⁹⁾。ニョッキ＝ヴィアーニは、こうした批判を意識してか、『ラ・プレーベ』紙で、同紙編集部との政治に対する見解の相違について述べている。彼の考えでは、政治問題は労働者解放の手段としてある程度有効であるものの、いわば水銀のような必要悪であり、可能な限り排除されなければならない⁷⁰⁾。

一方、『ラ・プレーベ』紙の在ナポリ通信員は、ジュネーヴの「同業組合連盟」における「革命性の欠如」を批判し、イギリス型の労働組合はイタリアには根づくことができず、バクーニン以前にピサカーネが宣言していた集産主義的アナーキズムが適していると述べている⁴¹⁾。この匿名記事は、アナーキストのものであろう。『ラ・プレーベ』紙には、このようにアナーキストはもちろん、フランスの文豪ユゴーからエンゲルスまでの幅広い人々が文章を寄せており、意見を異にする人々を排除しようとはしない編集部の姿勢がうかがえる。『第三のインターナショナル』についても批判が目につくが、同書をめぐって様々な人々が意見を交わすなかで、新しい思想や運動を形作ろうとしたのではないだろうか。

その後、ニョッキ＝ヴィアーニは、1876年にはローマからミラノに移って『ラ・プレーベ』編集委員の一人となり、ビニャーミとともに、労働者組織の連合体である「インターナショナル北イタリア支部連合」(Federazione dell'Alta Italia dell'Internazionale)や、労働者を主体とする教育研究サークルの設立に努力する⁴²⁾。そして、アナーキズムが1877年のベネヴェント蜂起失敗を機に衰退する一方で、彼の主張する、労働者の経済的解放を目的とする「イタリアの大労働者政党」は、1882年の「イタリア労働者党」成立により、具体化されることとなる。

ニョッキ＝ヴィアーニの思想や行動に対する評価は、思想史的考察にとどまらず、労働運動をはじめとする、その時代のイタリアの状況との関わりの中なかで行われるものでなければ、その真意を理解することはできないだろう。本稿は、その予備作業の一環である。

註

- (1) ニョッキ＝ヴィアーニおよび彼と関わりの深かったイタリア労働者党や、彼が設立者でもある労働会議所を「同業組合主義的」とする文献は、L. Valiani, *Storia del movimento socialista I, l'epoca della Prima Internazionale*, Firenze, La Nuova Italia, 1958(筆者未見); S. Merli, *Proletariato di fabbrica e Capitalismo industriale*, Firenze, La Nuova Italia, 1974. など。また、以下の文献は、労働者階級を基盤とした合法的社会主義の先駆者としてニョッキ＝ヴィアーニを評価しているが、彼の立場と議会・政党中心主義をとる改良主義とを区別していない。R. Hostetter, *The Italian Socialist Movement I, Origins (1860-1882)*, D. Van Nostrand, New Jersey, 1958; G. Manacorda, *Il movimento operaio italiano attraverso i suoi congressi, Dalle origini alla formazione del Partito Socialista 1853-1892*, Roma, Riuniti, 1963; A. Romano, *Storia del movimento socialista in Italia II, L'egemonia borghese e la rivolta libertaria 1871-1882*, Bari, Laterza, 1966. また、次の文献は、ニョッキ＝ヴィアーニや後述する『ラ・プレーベ』紙編集長ビニャーミがエンゲルスと書簡を交わしていたことを重視し、彼らを「マルクス主義者」と断じている。N. Rosselli, *Mazzini e Bakunin. Dodici anni di movimento operaio in Italia 1869-1872*, p.360n.; 山崎功『イタリア労働運動史』青木書店、1970年、64頁。
- (2) F. Della Peruta, *L'Internazionale a Roma dal 1872-1877*, in *Movimento Operaio*, 1952, gennaio-febbraio. なお、戦後に発表されたニョッキ＝ヴィアーニに関する文献でもっとも早いのは、彼の業績を、同時代の労働運動家、社会主義者の様々な評価とともに紹介したP. Mantovani(a cura di), *Vita ed opere di Osvaldo Gnocchi-Viani*, Verona, 1946. であろう。また、F. Anzi, *Osvaldo Gnocchi-Viani, Vita-Opere 1837-1917*, Milano, Società Umanitaria, 1955. は、イタリア労働者党員であった著者によるニョッキ＝ヴィアーニの伝記である。

- (3) L. Briguglio, *Il Partito Operaio Italiano e gli anarchici*, Roma, Edizioni di Storia e Letteratura, 1969 ; L. Briguglio, *Congres(Congressi) socialisti e tradizione operaista 1892-1904*, a cura di L. Briguglio, Padova, Tipografia Antoniana, 1972. また、次の文献はブリグッリョによるニョッキ＝ヴィアーニの晩年の著作の再刊行で、詳しい解説が付されている。O. Gnocchi-Viani, *Ricordi di un internazionalista*, a cura di L. Briguglio, Padova, Tipografia Antoniana, 1974.
- (4) V. Hunecke, *Classe operaia e rivoluzione industriale a Milano 1859-1892*, Bologna, Il Mulino, 1982.; L. A. Tilly, *Politics and Class in Milan 1881-1901*, New York, 1992 ; G. Cervo, Le origini della federazione socialista milanese, in A. Riosa (a cura di), *Il socialismo riformista a Milano agli inizi del secolo*, Milano, Angeli, 1981. これらの研究を参照した拙稿「19世紀末のミラノにおける労働会議所の成立と発展」『一橋論叢』1996年10月号、では、ニョッキ＝ヴィアーニと労働会議所との関わりに言及している。
- (5) G. Angelini, *Il socialismo del lavoro, Osvaldo Gnocchi-Viani tra mazzinianesimo e istanze libertarie*, Milano, Angeli, 1987 ; G. Angelini, *Altro Socialismo, l'eredità democratico-risorgimentale da Bignami a Rosselli*, Milano, Angeli, 1999. G. Angelini, A. Colombo, V. Paolo Gastaldi, *La galassia repubblicana, Voci di minoranza nel pensiero politico italiano*, Angeli, 1998. また、アンジェリーニ編によるニョッキ＝ヴィアーニの著作集には次のものがある。Oltre la Politica. Valori e istituzioni per una società nuova, Milano, a cura di G. Angelini, Milano, Angeli, 1989 ; O. Gnocchi-Viani, *I sansimoniani*, a cura di G. Angelini, Milano, Angeli, 1996. 後者は、ミラノのフェルトリネッリ研究所に保管されているニョッキ＝ヴィアーニの未発表草稿の一部を編集したもの。
- (6) P. Ferraris は、ボローニャ労働会議所の開所100周年を記念して発行されたO. Gnocchi-Viani, *Dieci anni di Camera del Lavoro e altri scritti sul sindacato italiano 1889-1899*, Roma, Ediesse, 1995. に解説を寄せている。F. Della Peruta(a cura di), *Osvaldo Gnocchi-Viani nella storia del movimento operaio e del socialismo*, Milano, Angeli, 1997.
- (7) O. Gnocchi-Viani, *Le tre internazionali*, Lodi, La Plebe, 1975. ここで、本書をはじめ、数々のニョッキ＝ヴィアーニの原著コピーを格別のとりはからいで郵送してくれた、ミラノの人道協会 (Società Umanitaria) 付属図書館に対して深く御礼申し上げる。同図書館のW. Manfredini, M. H. Polidoro両氏のご厚意がなければ、本稿は成立しなかった。なお、この人道協会は、1893年に労働者主体で運営される社会活動団体として設立されたもので、ニョッキ＝ヴィアーニはその設立に関与するとともに、総書記も務めた。註(4)の拙稿では、その設立時の事情に多少言及している。
- (8) 第一インターナショナルの通史としては、G. M. Stekloff, *History of the First International*, London, 1928; J. Braunthal, *History of the Internazionale I 1864-1914*, N.Y., 1967. を参照した。
- (9) O. Gnocchi-Viani, *Le tre internazionali*, cit., pp.2-3.
- (10) Ibid., pp.21-24.
- (11) 渡辺孝次『時計職人とマルクス — 第一インターナショナルにおける連合主義と集権主義』同文館, 1994年, 6 頁。なお、渡辺氏によれば、ジュネーヴの「同業組合連盟」については、Erich Gruner, *Die Arbeiter in der Schweiz im 19. Jahrhundert, Sozial Lage, Organisation Verhältnis zu Arbeitgeber und Staat*, Bern, 1968. で、スイスの労働者組織として言及されているという。筆者の問い合わせに丁寧に応じてくださった渡辺氏に、ここで改めて御礼申し上げます。
- (12) 筆者が見た限り、L. Briguglio, *Partito Operaio Italiano e gli anarchici*, cit., pp.6-7, が⁸, もっとも詳しい。これによれば、『労働者連合』紙にはイタリアに関する記事も散見され、ローマ、ミラノ、トリノ、フェッラーラ、パルマ、コネリャーノ (ヴェネツィア県) の労働者が「同業組合連盟」の綱領を賞賛したことも報じられた。
- (13) O. Gnocchi-Viani, *Le tre internazionali*, cit., pp.48-52.
- (14) Ibid., p.121.
- (15) Ibid., pp.24-28.
- (16) Ibid., pp.68-71.
- (17) Ibid., pp. 71-74.

- (18) Ibid., pp85-89. この大会には、ジェノヴァの労働者連合のほか、パルマ、トリノ、フェッラーラの社会主義グループ、トゥレイラ（マルケ県）のグループが参加したという（Della Peruta, *Internazionale a Roma*..., cit., p.30.）。
- (19) Merli, *Proletariato di fabbrica* cit., pp. 582-594. などを参照。
- (20) この辺の事情をのべた邦語文献として、戸田三三冬「1871年ナポリ青年群像 — エーリッコ・マラテスタ序章 —」『日伊文化研究』第20号（1982年）、同「ナポリ《ラ・カムパーナ》考」（その一）および（その二）『史艸』第27号（1986年）、第28号（1987年）、同「リビアとイタリア」江口朴郎・板垣雄三編『交感するリビア — 中東と日本を結ぶ』1990年、藤原書店がある。
- (21) Romano, *Storia del movimento socialista*, cit., p.608.
- (22) Della Peruta, *Internazionale a Roma*..., cit., p10, p.11n. 若きニョッキ＝ヴィアーニのマッツイーニ主義者としての活動は、Angelini, *Il socialismo del lavoro*, cit., に詳しい。
- (23) Ibid., p.12.
- (24) Gnocchi-Viani, *Ricordi di un internazionalista*, cit., p.146. ニョッキ＝ヴィアーニは、リグリア労働者協会常任委員会の代表としてローマ大会に出席していた。
- (25) Della Peruta, *Internazionale a Roma*..., cit., p.5.
- (26) Ibid., p.15.
- (27) Ibid., appendice documentaria, p.39. リミニ大会は8月4日、この手紙は8月18日付である。
- (28) 1872年4月24日、6月5日付の『ラ・プレーベ』紙には、イギリスの農村部でのストライキに関するエンゲルスの記事が掲載された（Angelini, *L'altro socialismo*, cit., p.65.）。これは当時のニョッキ＝ヴィアーニのエンゲルス観に大きく影響したであろう。
- (29) Della Peruta, *Internazionale a Roma*..., p.18.
- (30) Ibid., pp.13-15.
- (31) Ibid., pp.18-19.
- (32) Ibid., p.21.
- (33) Angelini, *Il socialismo del lavoro*, cit., pp.90-95.
- (34) 『ラ・プレーベ』やビニャーミも、註（1）の諸研究などで、ある時期まではマルクス主義的立場からの一面的な評価を受けてきたが、新しい研究には以下のものがある。Angelini, *L'altro socialismo*, cit.; C. Giovannini, *La cultura della "Plebe", miti, ideologie, linguaggio della sinistra di un giornale d'opposizione dell'Italia liberale(1868-1883)*, Milano, Angeli, 1984.
- (35) 『ラ・プレーベ』は、1974年にミラノのフェルトリネリ研究所が復刻版を刊行し、その1セットを北海道大学文学部西洋史研究室が所持している。筆者は、1998年夏より、当時北海道大学文学部長の職にあった北原敦先生（現帝京大学教授）のご厚意で、その全巻を長期にわたってお借りすることができた。本稿はそれをもとにした研究成果の一部である。北原先生には、改めてご厚意に感謝申し上げます。本文で言及したのは、以下のニョッキ＝ヴィアーニの署名記事（Osvaldo とある）である。1874. 6.11.（靴職人組合）、1874. 7.29.（印刷工組合）、1875. 3.6.（レンガ工）、1875. 4.17（カトリック系）、1875. 8.7（相互扶助協会）。
- (36) Della Peruta, *Internazionale a Roma*..., cit., pp.7-8.
- (37) Ibid., p.8.
- (38) *La Plebe*, 1874. 7.29.
- (39) O. Gnocchi-Viani, *Le tre Internazionali*, cit., p.V, e pp.VIII-IX. なお、マロンについては山崎、前掲書、110-111頁を参照。
- (40) *La Plebe*, 1875.11.21-22.
- (41) *La Plebe*, 1875.11.23-24.
- (42) この間の経緯については、註(1)の諸文献を参照。